怖ろしい場所・吉行淳之介

新潮社版

©Junnosuke Yoshiyuki 1976, Printed in Japan.

怖ろしい場所

昭和51年1月15日印刷
昭和51年1月20日発行

著　者　吉行淳之介
発行者　佐藤亮一
発行所　株式会社新潮社
162東京都新宿区矢来町71
Tel・業務部(03)266-5111
・編集部(03)266-5411
振替　東京4-808
印刷所　二光印刷株式会社
製本所　神田加藤製本
定　価　900円

乱丁・落丁本は，御面倒ですが小社通信係宛御送付下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

怖ろしい場所

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

1　厄年の二人

こわい夢にうなされて、目が覚めた。

このごろ、羽山圭一郎は毎日のようにこわい夢をみる。

「ああ、夢だったのか。それなら、このままでいいんだな」

と、ぼんやりしている頭で考える。

そのうちに、その夢が、滑稽におもえてくることがある。

この日の夢も、そうだった。

粘土をこねて、大きな楕円をつくった。その上に、まるい球を載せようとしている。だるまのかたちのようにもみえる。灰色の粘土をこねているだけなのに、表面が白くすべすべしてきた。しかし、雪だるまのように黒い眉や目はなくて、白一色ののっぺらぼうである。

なにをつくろうとしているのか自分でも分らないのだが、見覚えのある女になってきた。目も鼻も口もないのだが、そのままで女の顔になっている。よく知っている女の顔にちがいないのだが、誰なのか思い出せない。

あたりを憚る気分が起ってきたとき、すぐ目の前に、女ものの鬘（かつら）が置いてあった。ウエーブをしていない髪を、片側だけ長く垂らしたかたちである。

その鬘を手にとると、白い球にかぶせた。のっぺらぼうのまま、まるい球はその女の顔になってしまい、羽山を烈しく罵りはじめた。

罵っている内容は聞えてこないし、その言葉が出てきている筈の口もない。

言葉の一つ一つが硬い玉のように皮膚に当って痛いので、彼は両手を上げて防ぐ素振りになり、

「おい、よしてくれ。どういうことなんだ」

と言っているうちに、目が覚めた。

正午を過ぎていた。羽山圭一郎は小説家だが、この職業の取柄は、こんな時刻に目が覚めてもあわてて飛び起きなくてもよいことである。ベッドに横たわったまま、奇妙な夢の後味が抜けてゆくのを待っている。

「なんだか、くたびれたなあ」

羽山はそう呟くと、タバコをくわえて、ベッドを離れた。

食堂にゆくと、妻の千加子がコーヒー・カップを前にして、テレビの料理番組を見ていた。

「さっき、川田さんからへんな電話がありましたよ」

「ん……」

「まじめな声なんだけど、おかしなことをおっしゃるのよ。川田さんのお友だちが、北海道から鮭を送ってくださったんですって」

「……うん」

「その鮭の顔が、もと子さんにそっくりなんですって。いままで、気がつかなかった、といって驚いていらしたわ」

もと子というのは、川田鉱三の細君の名である。

「馬鹿だな、あいつは」

羽山は、鮭という魚の頭をおもい出してみた。

「鮭というのは、わりに平凡な顔をしているよ。鮟鱇とか鮫に比べれば……」
川田の細君を、彼は頭の中に描いてみた。いわゆる美人だが芯の強そうな顔である。
「北海道の友人から、鮭を送ってきた、と言ったね」
「ええ」
「いまの時節だと、新巻で縄かなにかで吊したりするやつだな」
「あまり好い恰好じゃないわね」
「そうだな」
口を開けてぶら下っているのは、良い眺めではない。夫婦喧嘩でもしたのだろうか。
「とにかく、川田さん、今日は一日お宅にいらっしゃるそうよ」
「ふーん」
羽山は、気のない声を出した。
「川田さんの経理事務所の秘書の人、ほら、いままでいらした中年の女のかた、おやめになったんですって。それで、この三日ほどお宅にいて奥さまに手伝ってもらっているって、おっしゃっていたわ。経理士さんて、いまごろから忙しくなるらしいのね」
「税金の時期が近いからな」
羽山圭一郎と川田鉱三とは、大学以来の友人である。正反対の性格なのだがウマが合って、卒業してから二十年近く経っているが、つき合いがつづいている。
羽山は数字のことが苦手である。その方面のことは、経理士になった川田に一切まかせてしまっている。
羽山には、子供がない。
川田鉱三は、四人の子持ちである。
トーストとペーストと野菜ジュースだけの簡単な食事を済ませると、羽山は電話をかけた。

「おい、いま起きたぞ」
と羽山は言って、わざと「ああーっ」と欠伸(あくび)をした。
「おい、あくびをしながら電話をかけるな」
「ま、怒るなよ」
川田は怒りっぽい男である。
「いま聞いたがね。はやく鮭を持ってこい」
「なんだと、ひとにものを貰うのに、持ってこいとはなんだ」
「鮭は何匹貰ったんだい」
「一匹さ」
「そのおすそ分けか。鮭の切身を貰うのに、いちいち取りに行けるか。それとも一匹全部くれるつもりか」
「ばかな。それじゃ、おれの分がなくなってしまう」
「頭だけは残しておいてやるよ」
「ふむ頭ねえ。……それにしても、よく似てるぜ」
川田の声が、小さくなった。
「本人に、そのことを言ったのかね」
「言っちゃったんだよ。おれ、こらえ性がないからな。だいぶ機嫌がわるくなって、いま隣りの部屋で仕事を手伝っているんだが、能率が上らないな」
「秘書の女性、やめたんだってな」
「急にやめられて、参ったよ。一週間ほどしたら、女の子が一人くることになってるんだが」
「ところでな、鮭はともかくとして、この冬になって、まだふぐを食ってないんだ。ふぐにたいしてにわかに食欲が湧いてきたんだが」

「ふぐか、悪くないな」
男同士のあいだで、たちまちその夜の約束がまとまった。
日が暮れてから、料理屋の小さい座敷で、二人は向い合っていた。鰭酒を飲みながら、河豚の出てくるのを待っている。
「君、どうして突然かみさんが鮭にみえたんだ」
「どうしてかな。鼻曲りの鮭は雄だからね、そんなにグロテスクでもないんだが」
「しかし、人間が魚にみえるとは、穏かではないな」
「危険な兆候かな、お互いに厄年だし」
「ふぐに中毒らないだろうな」
「まさか。だいたいふぐなんて、こう値段が高くなくたっていい筈だ。あたらないための料理代が含まってるんだろ」
と、川田が言っているとき、薄づくりの身をきれいに並べた大きな皿が運ばれてきた。

ふぐ料理屋を出たとき、二人はほろ酔い加減であった。
「さて、どうする、バーでも行くか」
と、川田が言う。
「今夜は、あまり酔うと具合が悪いんだがな。明日から、ちょっと旅行に出なくてはいけない」
「旅行ぐらい、どうということもないだろう」
「それもそうだが、厄年というのは、どうも本当にあるらしいな。つまり、軀の中のバランスが変る時期らしくて、心身ともにいささか不安定なんだ。そういう自分に腹が立ってね、わざと強行軍の旅をしてみようとおもって」
「どこへ」

「スペインあたりまで、往復八日ほどで」
「それは、ちょっと辛いな」
そういう会話をしているうちに、二人の足はしぜんに行きつけの酒場へ向っていて、やがて扉の前に立っていた。
「おや、きてしまったよ」
「それじゃ、入ろう」
「入るのか、大しておもしろくもないぜ」
「それなら、なぜここへ歩いてきてしまったんだ」
「ふしぎだね」
と言いながら、羽山は目の前の扉を押した。小さい店で、しばらくするとマダムが席にきて座った。その顔を羽山はあらためてゆっくり眺めていたが、
「このひと、見覚えがあるな」
「当り前じゃないの」
「それは当り前なんだが……」
今朝の夢に出てきた顔に似ているような気がしたのだが、霞んだような眼のところにだけ見覚えがあって、全体の印象はずいぶん違う。
「どうしたの、じろじろ見て」
「夢に出てきた顔に似てはいないか、とおもってね」
「似ているかどうかは、夢の中だって一目みれば分ることでしょ」
「それが、のっぺらぼうなんで……」
「のっぺらぼう、ですって。それじゃ顔じゃないでしょ」
「のっぺらぼうなんだけど、奥のほうにたしかに顔があるんだ」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

「へんなお話ね」
からかわれたとおもったのか、マダムは機嫌がよくないので、羽山は話を打切った。夢の話は、川田にもしていないので、
「君、わるふざけはやめろ。それより、なにをしに、スペインへ行くんだ」
「さっき、話しただろ。強行軍をして、体力をためしてみるんだ」
マダムが口をはさんだ。
「パリには寄らないの」
「二日くらいは寄ることになるだろう。みやげを買ってきてあげる。ただし、嵩ばらないものだよ」
「おれもそのうち南米に行く予定だから、なにかみやげを買ってきてあげる」
羽山に対抗するように、川田が言う。以前から、このマダムを川田は口説いている。
「なにがいいですか。鰐皮のハンドバッグなんか、どうですか」
と、マダムににじり寄っている。
その態度が露骨すぎるので、座が興醒めてきた。
「そうですねえ。そのときは、よろしくね」
軽く受流しているのだが、相手があまりになまなましくなっているので、マダムのほうもどこかぎごちなくなってしまう。
このマダムと、羽山は以前関係があった。いまでも、思い出したように、ホテルに行くことがある。

2　エマニエル夫人

羽山圭一郎は、絵を見るのが好きである。絵を眺めて、自分なりの感想をもつだけのことだが、旅行しても名所旧蹟には無関心なのに、絵画館には進んで出かける。

スペインのマドリッドに行っていた羽山は、夜おそくパリに着いた。パリのオルリイ空港から飛行機に乗らなければ、日本に帰れない。

出発まで、二日だけ時間がある。

翌日の午前十時に羽山は「ジュ・ド・ポーム」という小さい美術館にいた。印象派の絵ばかり壁にかけてあるので、「印象派美術館」ともいう。

ピカソのゲルニカとかマネのオランピアとか、日本に持ってきて展覧したら、その一枚だけで列ができてしまう名品が、さりげなく壁にかかっている。

一時間ほどで、その建物を出た。数百メートル向うに、ルーブルが平たい形で見えている。左右にやたらに長い建物で、一たん入ったら歩くだけで何時間もかかりそうなので敬遠した。

ジュ・ド・ポームから五十メートルほど離れたところに、ほとんど同じ大きさの「オランジュリー美術館」が建っている。そこを覗いてみようと歩き出した。二つの建物のまん中あたりに、人工の池がある。あたりにはほとんど人影がない。

その池の近くにさしかかったとき、東洋人の女が声をかけてきた。

「パルレ　ヴー　フランセー」

二十年ほど前、学生のころにフランス語の授業があったので、羽山は単語はすこし覚えている。しかし、会話となるとほとんどできない。もっとも、単語と身振りで、日常会話を成立たせることはできる。

「フランス語ヲ話セルカ」

と聞いていることは分るので、

「ダメ」

といって、相手の顔を見た。東南アジア系の顔だちだが、どこの国か分らない。西洋人から見れば、日本人との区別もつかないだろう。

「英語ハドウカ」

と、これもフランス語で聞く。

「ホトンド、ダメ」

女の顔には東洋人独特の薄笑いが浮んで、

「日本人カ」

そうたずねるので、

「ソウダ」

と返事しても、依然としてフランス語しか口にしない。日本語を知らないらしいが、パリにくる日本人が手頃なカモだという知識だけは持っているようだ。

なにか喋るのだが、話が複雑になるともう分らない。黙って相手を眺めていると、

「セックス」

と、女が叫んだ。

朝の十一時ごろ、

「セックス」

と叫ばれても、これは相手によりけりである。その東洋の女は、灰色の厚手の靴下にサンダル履きで、肩から安ものの黄色いショルダー・バッグをかけ、片手に折りたたみの空色の雨傘をもっている。お白粉気はなくて、茶色っぽい皮膚の色をしている。

年齢はおそらく二十代の末なのだろうが、四十女の感じで、まるい顔にまるい眼がへんに光っている。

とても、昼前の情事をする気分になれる相手ではない。

「自分ハトテモ疲レテイテ、ダメダ」

そう断ると、

「疲レテイルナラ、マッサージヲシテアゲル。ワタシノ家ニキナサイ」

と言う。

パリの娼婦が「ワタシノ家」というときには、だいたい近所の安ホテルを意味している。しかし、このときには、その女の安アパートという感じがあって、セックス以外の好奇心が動いた。ただ、全財産を内ポケットに入れているので、家へ行って男が出てきて取られたら困る、とおもった。

「ダメダ、マッサージハキライダ」

「ワタシッテ、セックス上手ナノヨ」

と、眼を光らせて言うので、羽山は黙って女から離れ、オランジュリー美術館のほうへ歩き出した。

その建物の中で絵を見ながら、

「あの女ともうすこし話をしてみてもよかったな」

と、やや後悔しながら、戸外へ出た。女の姿はもう池の傍には見えない。

羽山は近くのホテルに戻ろうとして、歩道を歩いていると、その女が白人に話しかけている。

夜になって娼婦がたくさん出てくると、とても商売が成立たない風貌なので、午前中に客を引いているのだろう。しばらく立ち話をしていたが、白人の男はそのまま去っていった。羽山は近寄って、話しかけた。

「ドウダイ、ソコラノ店デ二十分ホドオ茶デモ飲ミナガラ、話ヲシナイカ」

「……」

「金ハ払ウヨ」

「イクラ呉レルノ」

「キミカラ金額ヲ言イナサイ」

「アンタカラ先ニ言ッテ」

ここらあたりは東洋人の特質で、お互いに先に言わせようとして、押問答がつづき、

「八十フラン」

と、ようやく女が言った。

八十フランといえば、五千円ほどである。お茶をご馳走して、話をするだけでそれだけの金額を要求するとは、虫が良すぎる。

「トンデモナイ」

羽山はすこし腹が立った。

「ソレジャ、五十フラン」

「ダメ」

十フラン札を、羽山は女の手の中に押しこんで、言った。

「チョット歩コウ」

歩きながら、話をしてみようという考えである。まず、その女がどこの国の人間なのか、確かめたい。

「国籍ハドコナノカ」
「フランス」
と女が答えたので、羽山は戸惑ったが、気を取直して違うたずね方をしてみた。
「ドコデ生レタノカ」
女は、「ああ、そういうことなの」という気配を示して、
「サイゴン」
そういうことか、と羽山はおもった。ベトナムの生れなら、国籍がフランスでも不思議はない。
「サイゴン、カ。大変ダナ、何年前ニココニキタノカ」
「七年前」
話がそういう方向に進むと、それ以上は羽山の外国語は役に立たない。
街角で手を振って別れ、ホテルに戻った。
翌日も、羽山は早く目が覚めた。その日の夜の飛行機に乗る予定になっている。
ひげを剃ろうとして、電気カミソリが毀れているのが分った。２２０ボルト用のものを用意していたのだが。羽山の泊っているホテルは、シャンゼリゼを下ってしばらく歩いたところにあるコンコルド広場の近くである。ほかの地区はどうか知らないが、その界隈には日本ではよく見かける電機器具店が一軒もない。
電気カミソリは、百貨店か薬屋に行けば買える。十年前にやはりこの近くのホテルに泊っていたとき、オペラ座まで歩いてすぐだったし、その裏手の百貨店に入った記憶がある。方角の見当をつけてしばらく歩いていると、警官が立っていた。
「オペラ座ハ、ドノ方角デスカ」
羽山としては、即座に答えが戻ってくると考えていた。しかし、警官はポケットから地図を出して、調べはじめた。こういう場合としては信じられないほどの長い時間が経って、ようやく手

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com